

長崎県野母崎町樺島の通学合宿と学級通信「赤ひげ」

本村, 信幸
社会福祉法人野母崎町社会福祉協議会

<https://doi.org/10.15017/9036>

出版情報：生活体験学習研究. 3, pp.85-92, 2003-03-01. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

長崎県野母崎町樺島の通学合宿と学級通信「赤ひげ」

本村 信幸

Tūgaku-gasshuku (Going to School from the Camping Facilities) in Kabashima, Nomosaki-cho and Classroom Newsletter “Akahige”

Motomura Nobuyuki

要旨 子どもだけの作戦会議で決めた「失敗に学ぼう」「一人一人が責任を」というめあてを掲げ1週間の通学合宿に挑戦した子ども達は、もらい風呂で地域の方々から温かく迎えられ日々成長していった。その失敗は、後日の修学旅行でも活かされました。学級通信「赤ひげ」は、子どもの1週間の心のスケッチであり小学校が保護者へ発信する大変貴重な生活体験ニュースです。

1. 長崎県野母崎町樺島地区の通学合宿の概要

樺島地区は、人口約800人、世帯数約350、うち一人暮らし老人世帯78、高齢化率36%であり、樺島小学校は児童数48人、学級数5、三方を海に囲まれた漁業の町が通学合宿の舞台です。(平成14年10月現在)

第1回の通学合宿事業は、平成11年の秋に樺島小学校で始まり、2回目からは公民館で実施しました。4回目の今年は、平成14年9月8日から14日までの6泊7日で、5～6年生17名を対象に、同公民館を宿泊場所として行なわれました。前もって子どもだけの作戦会議で日程や役割を決めさせ、「失敗に学ぼう」「一人一人が責任を」というテーマを掲げて1週間の共同生活が始まりました。生活支援ボランティアとして、地元長崎の学生スタッフに加えて、今年は熊本大学教育学部の学生も参加しました。生活は、ご飯を炊く時水を忘れて、洗濯物の中に懐中電灯を入れたまま洗濯したり、ささいなことでケンカになったり、恒例の枕投げに興じているうちに自分たちで決めた計画時間が大幅に遅れて、当然寝不足になり、学校では居眠りしそ

うになったり、失敗の連続でした。

しかし、何といたってもこの取り組みのメインイベントは、公民館にお風呂がないので近所の高齢者宅へ「もらい風呂」に行く事です。受け入れていただいた高齢者からは「久しぶりににぎやかな一時でした。短い間でしかけど待ち遠しかったです。また、来年も待っています。」「一人ですので、久しぶりに孫が来たようで楽しかったです。」との温かい声が寄せられました。そして、それに応えるように、5日目の夜、子どもたちは「何かお礼がしたい」と、眠い目をこすりながら、手づくりのプレゼントをみんなで作りました。翌朝登校前に、それぞれが元氣よく「ありがとうございました。」と玄関先で渡すシーンには、私自身、感動で胸が熱くなりました。

この通学合宿事業を通して、もらい風呂が心温まるふれあいを生み、地域で子どもを育てる具体的な形ができたことは何ものにも代えがたい喜びです。地域での子どもの望ましい育ちのためには、まず大人同士の人間関係・信頼関係が必要かつ不可欠であることをあ

連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

社会福祉法人 野母崎町 社会福祉協議会 (〒851-0505 長崎県西彼杵郡野母崎町野母563-1)

TEL (095) 893-0600 motochan@muse.ocn.ne.jp (個人)

(Nomozakicyou Kabashima 307 Nagasaki City, Japan)

らためて気付かされました。公民館が種まきをして、これを住民が育て、喜んで迎えてもらえる地域はすばらしいと思います。これからも、ずっと続けていきたいです。

最後に、この通学合宿を体験した子どもたちのその後について報告します。10月の末、町内四つの小学校が合同で福岡市へ1泊2日の修学旅行に行った折のエピソードが樺島小学校だよりに掲載されていたので紹介します。

「ホテルでの夕食の時です。『食事の後は、ホテルの人が片付けをしやすいように食器はまとめておきましょう。』という担当の教師（他校）の言葉に、この6年生は見事に反応。全員で、食器別、残菜別、そして、お手ふきまで素早くきれいにまとめてしまったのです。ホテルの仲居さん曰く『こんな子どもたちは初めてです。私たちより上手。学校で指導しているんですか？』『いいえ、地域でやっているんです。』と、誇る気持ちを無理して抑えながら答えました。公民館での体験が経験として示された一場面でした。」

子どもたちはできるんです。大切なのは、大人が信頼して任せることではないでしょうか。



2. 学級通信「赤ひげ」について

樺島小学校の5年生は、学校や家庭での様子を日記に書きます。それは即ち子どもたちの心の動きそのものです。担任は、この日記に写ったものをしっかり受けとめ、学級通信『赤ひげ』に編集、翌日保護者に届けられます。通学合宿という子どもにとって初めての事件は、担任にとって学校では観察できない興味深いものようで、このニュースはいきいきと綴られているのはとても面白い。合宿期間中は子どもが家に帰らないので、担任が毎日「赤ひげ」を自宅へ配達しています。この学級通信には、「学校」の視点からの通学合宿事業の評価や意味付けなども織り込まれていて、とてもありがたいものです。

今回の通学合宿に関する「赤ひげ」は第42号から63号まで22回発行され、保護者の手元に届けられました。本実践レポートでは、そのうち通学合宿開始直前の42・43号、トラブルが発生しやすい第4日目の54・55号、そして終了後の62・63号を掲載します。学級通信の紙面から、通学合宿の日程を追って子どもたちが直面した「失敗に学ぼう」というめあての展開とその生活体験学習の視点からの意味付けをくみっていただければ幸いです。資料として転載をお許しいただいた樺島小学校の皆様には厚くお礼申し上げます。



コロの名前のひみつ

「かわいいー！」
私とお姉ちゃんが、声をそろえてさげびました。なぜか
というと、耳がたれた子犬をお父さんが抱いていたからで
す。

家へ帰ったお母さんが、
「コロコロとるねね、その犬。(名前は)『コロ』にすれ
ば？」

と、発言しました。
『コロ』っていいかもね〜！『しんちゃん』は、似合わない
ね！」

と、私がお姉ちゃんに言い聞かせました。

そうすると、お姉ちゃんから、

『ユナ』とか『ブルー』より、『しんちゃん』の方が絶対マシと思うし、

私も『コロ』がいいと思っただんですー！」

と、反撃されました。

そして、みんな「コロ」という名前がいい、とこっち団結し、「コロ」
という名前になりました。

う〜ん、すばらしい！なんだかんだと言いながら、最後には大きなままとまりを
見せる辺り、良い家族ですよねえ。にぎやかで、明るい雰囲気伝わってくる作
文です。

さて・・・これほどまでとは言わないけれど、まとまりきれぬか「通学合
宿」？！

今日から毎日、例によって通学合宿に視点を定め、当分の学級通信を書かせて
いただきます！

題しまして、

「花も嵐も踏み越えて！行くが稚小高学年！」
果たしていかなる顛末となりますことやら、どうぞ最後までおつきあいくださ
〜い！（気分は「小沢昭一の小沢昭一の小沢昭一の小沢昭一」(大学時代以来大好きなラジオ
番組)です。ハイ。)

話はさかのぼること1週間。新学期も始まったとはいえ、そこはそれ、長い夏
休みの直後です。どうしてもボヨン光線が発射されてしまう場面もありました。
しかーし！そうそういつまでもボヨンとしてない、この五年。木曜日に取り
組んだクラスターマの掲示用横断幕描き(本当は1学期にやっておくべき事なん
ですが、その余裕がなかったんです。すみません。)では、幕の横幅を描き込む
べき字数で割って、均等に字を配置するための一文字分の幅を割り出そうとして
おりました。

「おっ！やるなっ！」

率直に感心したものです。誰言うともなく、そういう計算が始
まったと言いますから、物事を数理的に把握し、解決しよう
とする思考が、自然の内に働いたということになります。
作業的にはやや遅れていたわけですが、どうしてどうして、
とにかく頭のシャープさをほめました。

その後に関心なもので、小体会の練習などで時間のやりく
りも難しい中、給食後のちよっとした時間などを利用して、
週内に仕上げてしまいました。

「うおっ！すごい！」
何と申しますか、気合い十分なもの伝わってくるのでありま
した。

そうする内に、スイミングフェスタも終わりました。通学合宿も、
ついに目の前です。

そこで、簡単なアンケートを取ってみることにしましたのです。その内容は、以
下の通り。

【アンケート内容】

- 1 今の気持ちは？ 次の4つから1つを選んでください。
・わくわく(楽しみ) ・どきどき(期待)
・ちよつと不安 ・ものすごく心配
- 2 「1」の答えの理由は？
- 3 一番頼りにしている六年生は誰？ その理由は？
- 4 この合宿をどんな合宿にしたいですか？

さて、その結果なんですけど、ちよつとまとめとめてみました。

【アンケート結果】

- 1 ・わくわく(楽しみ) = 4名 ・どきどき(期待) = 0名
・ちよつと不安 = 1名 ・ものすごく心配 = 0名
- 2 ・わくわく組
料理などいろいろなる事をみんなでするから。
みんなで寝泊まりできるから。
初めてで、どんなことをするのかわくわくする。(2名)
・不安組

3 昨年は不まじめな人が多かった、とある六年生に聞いたから。
今は、ナイショにします。

4 いくつかお話しする機会があるかもれません。

- ・ いろいろな事にチャレンジして、いろいろな事を学びたいです。
- ・ 楽しい通学合宿にしたいです。
- ・ みんな仕事をなまげずに、いろんな「がんば」ができる合宿に
したいです。
- ・ 楽しみたい。
- ・ 六年生にとっては最後の合宿だから、楽しみたい。そして、



第5学年
学級通信

失敗にも学びたい。

・・・というようなわけで、至って真摯、大きな期待を抱いて参加していることがお解りいただけると思います。最後の言葉なんか、ジ〜ンとききますよね。

しかし、想いと現実とはしばしば裏腹になりがちなのではないので、この通学合宿にいたしましたとしても、決して楽な道ではないのであります。

生活意識や生活力の違う者同士が寄り集まって自活していくわけですから、どうしてもどこかに「穴」が空きます。その「穴」をめぐって、喜怒哀楽が交錯するのであります。一方の「常識」が他方にはそうでもなく、他方の「当たり前」が一方にはアンビリバーボー（信じられない！）だったりするわけでありまして。

そんな問題場面をどう受け止め、どう解決するのでしょうか。そこに、教育効果が生まれてくる、と思うのです。

そういういざごさも含めて、

「苦しかったけど、楽しかった。」

と言えたら、通学合宿は成功したと言えるのでしようね。

さて、ではこの五年生がそこまでの覚悟を決めて参加しているのでしょうか。・・・これは、難しい所でありまして。じつと見守る中で、答えが見えてくるのでありましよう。

が、覚悟のあるなしにかかわらず、合宿生活に入った以上、そこから生まれ様々な状況に対して「他人」でいることは許されません。否が応でも関わ

り、立ち向かっていかなくてはならないのです。

「否が応でも関わり、立ち向かっていかなければならない。」

ここに、私は大きな意義を感じるのでありますが・・・。

「どうね？作戦会議は進みよるね？」

先週、何回か子どもたちにかけた言葉です。

「う〜ん、食事のメニューがなかなか決まりません。」

「最初の30分ぐらいは話し合いだけで、後はケンカやもんね。」

・・・うーん、どす黒い雲が低くたれ込めてくるような感じですが、

「何か起きる、いや、何か起これ！そこで、がんばれ！」

半ば祈るような気持ちで、しかし、何かニヤニヤしている自分に気づいたりするのであります。(悪魔か?)

そんなご託を並べている間にも、時間はどんどん進みました。

時計は、先週金曜日の放課後を指していたのです。その時、五・六年生は、

校長室にいたのでした。



校長先生が彼らに出した課題は一つでした。

『協力すること』と『感謝すること』を忘れない。スタートを目前に控えた彼らにとって、この課題はひととき大切なものだったのでしようか。いつも以上の真剣さと神妙さが、一人一人の瞳に浮かんでいたようです。

「加藤先生、小森先生、何か一言ないですか？」

と校長先生からお話を振られたわけですが、「ありません。」と即答致しました。(まあ、こういう所が「そっけない。」と嫌われたりするんでありますが・・・) 私ごとが言わんとすることは、合宿の中で出会い、味わっていくこととでしようから、その「現実」の中で向き合ってくればよいと思っております。校長先生の課題が全ての根幹に関わるものなので、それ以上の言葉はいらなかつたと思つたのでした。

「あつ！と引き締まる想い・・・かな?・・・だつてですええ、この直後撮影したのが右下の写真ですよ。

陽奈さん、健太郎くん、な〜にピースなんかってんだ！（余裕だな！）志哉くん、怒つてんのか？顔がコワイぞ！（緊張してんの？）奈保子さん、やけに明るいのね？（ピクニックに行くのとはワケが違うんだぞ！）桂子さん！なんだその「ヤッホーッ！」は!?



おうちの皆さんや担任の思いはどこ吹く風。やっぱりこの人たちの心は、「あの時」(おわかりですよね。「あの時」ですよ「あの時」)。2年生の生活科バス旅行の時です。)と同じで、どこまでも青く、どこまでも明るい空のよなのでした。

では、ここで一句・・・オホソ

負うた子に 教わりつつも 老婆心

・・・あんまり、うまくないスね・・・。

9月11日の日記です

「いかり」

岡本 健太郎

今日は、通学合宿4日目でした。

題は、「いかり」です。

今日、8時50分頃、ぼくはふきんを、少数の人といっしょにかたづけました。そうしたら、大学生の米ちゃんや「がんばったけんが、残りのかたづけは他の人にたのんでいいよ。」

と言われました。ぼくは、

「やったー！よかったー！」

と

考えました。しかし、他の人が帰って来た時、Bさん（六年生が）に

「かたづけせんぼ〜。」

と言われました。それで、

「大学生の米ちゃんが・・・。」

と話すと、横にいたCさんが

「さっさとせろ！そそがんとよかと！☆」

と、しっかりとぼけました。ぼくは、

「でっちらあげじやないかな？」

と疑問に思いました。

その後、手伝った後帰ろうとしましたが、史さんに

「みんながんばりよりけん、がんばって。」

と言われました。ぼくは、

「こんな言い方をしてほしいなあ。」

と思いました。

果たしてどういふ状況だったのか・・・もう少し詳しく確かめないと、何がどうだったのかは軽々しく論じられないですね。

集団生活です。それぞれの立場やそれぞれの思いが行き来します。そこには、当然の事ながら「すれ違い」が生じます。こういった問題場面が、この後、本人たちによって、どのように扱われたかが大切です。

健太郎くんは、反省会でこの問題を提出したのでしょうか？

また、少数で布巾の片づけをしていたという事ですが、ここに何か解決すべき不公平、不条理がなかったのでしょうか？

それは、問題として意識され、みんなの話題に登ったのでしょうか？

そういう所まで、この日記については考えていかなければいけないと思いましたが。

ただ、この日記のみでハッキリ言える事は、同じ事を伝えるにしてもやはり

「言葉遣い」は、大切だという事です。この件につきましても、本校の継続課題でありまして、徐々に改善が進んでいるもの、まだまだ取り組みを進めなければならない課題ではあります。

今井 志哉

今日、また写真で遊びました。陽奈さんなどを写しました。

ぼくは、1枚だけ良い写真を写しました。それは、米ちゃんや志伊奈姉ちゃんが写った写真です。

あと、絵本にのついていたゾウなど、いろいろな動物も写しました。

ぼくは、

「そのけいたい、ほしいな〜！」

と、野菜大臣に言ったかったです。

子どもというのは、素に柔軟で、新時代の技術などにはことのほか興味を示すようです。しかも、呑み込みが早いのです。

今回、志哉くんはさかちゃんやんの携帯に強い興味を示しましたが、子どもはいろいろなチャンネルから「近未来」とか「新時代」に触れ、それを刺激として自分の知識や技能に変えてしまうのですね。

そういった子どもの高い能力を、志哉くんの日記から感じました。

さて、これからは、合宿生活の悩みとでも申しましょうか、

「ううう〜ん・・・。」

と唸りながら奮闘している一コマです。

「通学合宿」

三村 陽奈

今日は、困った話をします。私が宿題をしている時、ホールからまわらぐが飛んできたのです。

まわらぐが当たったのは、私のえんぴつとぎだったのです。その時、私は「あ〜！だれが当たったの〜！このやろう」

と、心の中でさげばりました。

まわらぐを投げたのは、A君（前回登場の五年生です。）だったのです。投げられて、すごくいやでした。それに2回も投げられ、落とされたので

す。どうして、こんな事をするのでしょうか？ 困ります。



「ねむいいい〜(;_;)ぐずん」

辻原 桂子

今日の夕食は、「そうめん」と「オムライス」でした。

夕食を作っている中、うとうととしてしまいました。

その時、

「あー！がんばらなきゃ・・・ねむいけど！」

と自分に言い聞かせました。

食べたおれそうになりました。でも、ねむいのをこらえてがんばりました。

お風呂に入っている時は、もうねむたくはありませんでした。

お風呂には「タカちゃん」といっしょに入りました。

しかし、宿題の時はとてもねむたくなくなりました。私は

「ねむいいい〜(;_;)」

と、さげすびそうになりました。

「さわがしい！」

松尾 奈保子

今日、宿題をしている時、男子がうるさかったです。ですから、私は「うるさー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

と言いました。でも、まださわがしいです。

「男子・・・うるさいよ！」

と、さげんだのに、まださわがしいです。少しの間だけ静かでしたがまたうるさくなる、のくり返しでした。

そうしたら、マナー姉が

「早くねらんね！合宿何日目と思つとつと！」

と男子におこりました。だれかが、ステージ以外の電気を消しました。

そうして、やっとな静かになりました。

マナー姉の迫力は、すごかったです。

いろいろなことが、あったんですね。

合宿生活の中にある一種の開放感にひたつて、はじめを失い、人に迷惑をかける子も出てきます。

最初の健太郎さんのパターンのようにお互いの思いや考えがすれ違う場面も出てきます。

桂子さんのように、募ってくる疲れとの戦いも避けられません。

その一つ一つが、大切な学びのチャンスなのです。

通学合宿は、塾の勉強合宿や社会人の研修合宿ではありません。共に暮らす中で出てくる課題や問題を通して、人間としての考え方や関わり方、表し方を学ぶ、合宿だと思いません。

はじめを外す子を「困った存在」「規格外品」扱いして、はみ出し者、鼻つまみ者といったレッテルを貼るものではありません。

しかし、だからといって傍若無人な無法な行いを容認するということではありません。

合宿の中で起こってくるあらゆる事態を「プラスへのきっかけ」と受け止め、子どもたちに投げ返していく、ということなのだと考えられています。

「伸びんがために縮む」・・・尺取り虫の歩みのように、地道で一見暇がかかるけれども、確実に前進していく営みであるという点、通学合宿と学校教育の共通点かもしれません。

不愉快だなど思ってたままになった奈保子さん、いやな思いをした陽奈さん、うるさくてたまらなかった奈保子さん、それぞれがその事態をどう受け止め、どう乗り越えようとしたのでしょうか。

その「受け止め = 心」が知りたいですね。

ただブスブスとくずぶずるのか、愚痴をこぼして泣き寝入りするのか、はっきりと抗議して状況を改善しようとするのか、安易に大人を頼り「自分抜き」で事態の解決を図ろうとしなかったか・・・迷惑をかける方；かけられる方、双方にとっての「道場」が通学合宿だ点、個人的には解釈しています。

ただ、これはあくまでも私の個人的な見解でして、もっと深い、大きな意味や意義があると思います。

また、意味や意義というものは、参加者や支援者の意識一つでどんどん生まれ変わっていくと思います。今後更に洗練され、極められていけば、通学合宿の意義や意味、目標といったものもどんどん脱皮を繰り返して、大きく成長していくのではないのでしょうか。

「通学合宿」とどこにでもある名で呼ばれながらも、余国唯一の、どこにも真似できない、地元を根を下ろした地域教育の究極型を創り上げることも夢ではないように思います。

・・・話がそれました。戻しましょう。

様々な事態が発生する中、時におとどなが「真の怖さ」を見せることも大切で。今回の場合、マナー姉が男子を一喝して黙らせましたが、子どもの意識がタガを失いかけた時、おとなは「怖さ」をもって子どもに臨むべきだと思います。

そういう意味で、この場面のマナー姉は子どもたちにとって「母」であり、「おとな」であったと言えます。急所の一点は譲らない、という厳しい覚悟を呑んだ時、子どもを育てることができ・・・この点も、通学合宿、学校教育、そして家庭教育に通ずる部分かと思えました。

マナー姉、怒ってくれて、ありがとうございます。



「通学合宿」

三村 陽奈

13日で、私の通学合宿は終わりました。長かったようด้วย、短かった通学合宿。もう少し長くても良かったのではないのでしょうか？

自分では、そう思います。大学生ともらい風呂に入りました。初めて入った時、はずかしくていつしよに入るのがかまよってしまいました。

でも、今では「もつといつしよに入りたかったなあ〜。」と思う事もあります。いろいろるる大学生と、もつともつとお話したかったところかいしています。

初めて大学生に会った時、どんな事を話せばいいのだろうかと不安でした。ただの友達ではなく、大切な家族みたいでした。もう少しだけ大学生と話などでできればいいです。来年は、できるだけ長くお願いします！

深い受け止め方に、感心して読ませてもらいました。「ただの友達ではなく、大切な家族みたいでした。」

と言う件が、胸に迫ります。合宿計画を立てる段階で、六年生女子のほとんどが大学生との入浴を拒否していらなそうです。

解らないこととともありません。銭湯文化も蔑れる一方の日本です。修学旅行でも、みんなと湯船につかることに強い抵抗を示す子どもも珍しくなくなりました。

しかし！・・・と思うのです。非日常の空間、設定に挑戦するチャンスを捨てて、馴れた日常から冒険してみようとしなない・・・これは、ある種、人間性の退廃とも思えます。

「おおおお一！おもしろいかもしれんなあ〜！ひとつやってみるか〜！」という寝ねた感性を持っていてほしいです。

この辺りは作戦会議を切り盛りして下さった森さんや岡本さんがご苦労下さり「交代制で、全員が大学生スタッフと入浴する。」と道を拓いて下さったそうです。

この導きが、この日記を確々たの導きです。子どもを尊重するとは、無定見に子どもをの言いなりになることでもなければ、子どもの弱い、後ろ向きな振る舞いに振り回されることでもありません。そういう急所を外さずに対応して下さった森さん、岡本さんの指導に感謝し

ています。おかげで、陽奈さんのように、今までにない新しい視点点を拓くことができたと喜んでくださる言っています。

私は、子どもたちにしほば言っています。「自然豊かだが不便な所に住む人が、「いななか者」なのではありません。

冒険する心を失い、挑む心を失い、周りを視ては考えもなしに人と同じであることに気を配り、挑戦して成果を得た者を見てはうらやましうに眺めている者を「いななか者」と言うんです。

また、自らは傷みを負うこともなく、挑戦も努力もしないで安全な場所において失敗した人をバカにしている人を「いななか者」と言っています。

いつも新しい可能性に目を向け、ひたむきに努力する「独立自尊」の精神を持った若者に育ってほしいと、子どもたちに対して望みます。

・・・今回の新しい世界が、陽奈さんの「新しい眼」を拓いてくれました。通学合宿は、実に様々な効果をそれぞれの子に与えてくれたようです。

「お別れか〜！」

辻原 桂子

今日は、6泊7日の通学合宿最後の日です。7時30分に起きました。

朝食は、ご飯、フルーツポンチ、みそ汁、ぶどう、ポテトサラダ、ケーキ、お茶でした。とてもおいしかったです。

その後、そうじをしました。私は、マナー姉と階段をそうじしました。10時からお別れ会をしました。

まずは、スタッフからメッセージがありました。次に、「通学合宿名人の証」をもらいました。その時、すでに4人の女子が泣いていました。(Fさん(六年女子)と私をのぞく)

お別れ会が終わると、全員遊んでいました。この通学合宿は、とても楽しかったです。とても短かったけど、よい思い出になりました。

また、来年もがんばります！

最後の最後、14日のお別れ会は、それはそれはきれいな涙に彩られていたのです。こればかりは、言葉で表現できません。(もつとも表現できない程度の言葉しか持っていないのですが・・・)「感動した。」

と、恥ずかしく言えます。美しいですね。



その時、考えました。

通学合宿の主役である小学生は、「若くて小さい芽」です。その小学生たちを見守り、受け入れ、生活を共にしている学生スタッフの皆さんは「若くて大きな芽」です。

小さい大の差こそあれ、互いに「若い芽」なのです。この共通点、教師との関係とはまたひと味違った関係を築く源になっているのでしよう。

関わり合っている双方が揺れています。

教育実習の時のことを、思い出しました。・・・揺れているのです。

学生スタッフには、確たる教育的見通しを立てることが困難です。なぜなら、彼らは学生であって教師ではないのです。当たり前のことですが、必死に子どもたちに溶け込もうとすると彼らにあるのは、

「子どもたちを受け容れよう。」

「子どもたちに受け容れたい。」

という一途な、真っ白な「誠」だけです。

それは、科学的でも技術的でもありません。「教師と子ども」という世界とは、「ちがって違う世界」です。そこには、お互いが余りにも手探りである「あやうさ」があります。

ただ、「あやうい世界」ではありますが、彼ら学生の一途な姿には、「教育」の神髄、原点があると思えます。

いかなる科学・技術・理論が伴おうとも、彼らの持つ一途で真っ白な「誠」がなければ、「教師」たりえないと思えました。

「それ」がすべてではないけれども、「そこ」から始めなければ、何も生まれません。そういう大切なものがある、と思っただけです。

彼らの熱誠が、子どもたちに何を残したか・・・それを確かめるのがこれから3月までであり、それを風化させず子どもたちの成長につないでいくことが、教師である我々の仕事だと思っています。

すばらしい思い出ができました。しかし、それを「思い出」で留めるのなら、教師とは言えません。「思い出」を力に変え、次なる「より大きな目標、ハードル」を越えさせてこそ成長させてこそ、「教師」であるろうと思えます。

通学合宿を通して子どもたちが得たものの大きさを思うたびに、今後の責任の大きさと重さを思い知らされます。

来年の通学合宿は、もう始まっています。

これからの6ヶ月で、五年生5名を「六年生」に育てていきたいと思えます。少々のことでは屈しない、挑む心に満ちた「六年生」に成長してもらえよう、お手伝いさせていたただきたいと思えます。

先生、通学合宿の間、陰で子どもたちを守っていただきました。本当にありがとうございます。(略)

「赤ひげ」で、子ども達の様子を教えてください。その場に行かなくても手取るようにわからせていただきました。お陰で、我が家が笑いが絶えませんでした。

子どもたちは、田尻さん、学生さん、そして先生方のお陰で、1週間の通学合宿を経験することができました。本当に感謝いたします。この経験を、それぞれが生かせたらと願っています。

学生さん達とお別れは、とてもつらかったようです。人との出会いと地域の方々の協力、まわりの方々のお世話に、親としてほんとうに感謝します。

”人間っていいな”と、改めて、子どもを通して感動させていただきました。

(あるお母さんからいただいたお便りの抜粋です。)

今回の通学合宿は、保護者の皆さんによる話し合い、決定といった場面が強くなり、非常に画期的でした。

このお便りにもある通り、田尻さん始め、森さん、岡本さんを中心にすべての保護者の方が、何らかの形で学習会や打ち合わせ、意見交換、もらい風呂警護に参加され、合宿の目的やねらい、思いについて共通理解を進めることができました。

「かわい子には、旅をさせる」との言葉通り、保護者の皆さんと地域の皆さんの協力で、すばらしい「旅」を子どもたちに提供できたのではないのでしょうか。

樺島の通学合宿は、樺島保護者パワー&地域パワーの表れでもありました。今後の発展にも大きな期待を持つ事ができた意義ある合宿でした。皆さん、ほんとうにご苦労様でした。バンザイ!

